様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ２０１７６

研究課題名（和文）精神医療従事者の専門性に関する医療社会学的研究

研究課題名（英文）Medical sociological research on mental health professionalism

研究代表者
河村　裕樹（KAWAMURA, Yuki）

一橋大学・大学院社会学研究科・教育職（教務職員）相当

研究者番号：１０９０６９２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果は、実践の参与者の志向に即して現象を記述するエスノメソドロジー研究の方法論的態度において、症例検討会における相互行為を分析したことで、ケース（症例）の検討を行うということが、同時に専門性の違いや業務の範囲を確定することでもあり、新人や研修医を教育することでもあることを記述したことである。そのことによって、症例検討会の複層性のもとで、異なる専門性を有する専門家同士が協働することを可能にする基盤を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、特定の症例検討会における相互行為をエスノメソドロジー研究の観点から分析することで、ケース（症例）を検討する場面として自明視されてきた症例検討会の特徴に、当人たちが込めている意義や位置づけを分析的に付け加えたことである。
　このようにして得られた学術的意義は、実践の参与者たちが改めて自分たちの活動を振り返り、自身の専門性について考える材料を提供し得る。また、精神医学的知識について、教科書的な見方とは異なる仕方で理解する可能性を拡げ得る点で、社会的な意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The result of this study is that in the methodological attitude of ethnomethodology, which describes phenomena in accordance with the orientation of the participants in practice, the analysis of interactions in case conferences describes how the review of cases is at the same time a matter of establishing differences in expertise and scope of work, as well as educating newcomers and residents. In doing so, I have identified a foundation that allows professionals of different specialties to collaborate within the multifaceted nature of the case conference.

研究分野：医療社会学

キーワード：エスノメソドロジー　医療社会学　精神医療　専門性　症例検討会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

保健医療社会学における専門職論は、1970 年代の専門職批判の影響を強く受け、医療職の管轄権の拡大を日常生活の医療化と結びつけて批判的に論じる傾向が強いまま、今日に至っている。特に精神医療においては、反精神医学の影響のもとで、精神科医の管轄権について批判的に論じられる傾向が強い。しかし、実際に医療現場で調査を行うと、精神科医を含めた精神医療従事者たちが、制度上・理論上の区別を参照しながらも、どこまでをある職種が担い、どこからを別の職種が担うかという判断を、その都度の状況に応じて行い、境界線を引きなおしていることが観察された。このことは、多職種による協働が目指されるなか、現に医療場面で取り組まれている実践に即して知見を導き出す必要性を示しているといえた。

２．研究の目的

本研究は、多職種協働という今日の医療現場で求められる専門職のあり方を踏まえ、制度的・理論的な区別に先立つ形で行われている複数の専門職による協働の実際を社会学的に記述することを目的とした。その際、理念として掲げられることの多い多職種協働を実践に即して記述するには、研究者による区分ではなく、実践の参与者らが示し合っている理解を記述することが重要となることから、そのような人びとの志向に即して現象を記述していく研究プログラムであるエスノメソドロジー研究の方法論的態度において記述することとした。そのことにより、理念的・抽象的な水準での議論に、実践に即した知見を結びつけることを目指した。

３．研究の方法

調査先医療機関の精神科医局で行われている症例検討会でのフィールドワークと、症例検討会についての文献レビューを実施した。COVID-19 の感染拡大に伴う立ち入り制限により、症例検討会のフィールドワークは遠隔システムを活用した。その際、個人情報保護の観点から、録音・録画はせず、フィールドノートを記録するようにした。フィールドワークは、症例検討会が開催される日を中心に実施したほか、症例検討会の主催者 1 名と参加者 2 名に対する 1 時間ほどのインタビューもそれぞれ実施した。文献レビューでは、精神医療に関係すると思われる領域を含め幅広くリサーチを行い、領域ごとに症例検討会が果たしている役割や機能を整理し、その異同を比較・検討した。

４．研究成果

(1)　保健医療社会学においては、看護師など特定の職種に限定した議論がなされることが多いなか、精神科医や心理師、看護師など多様な職種の医療従事者が特定のケース（症例）について議論し、治療の方向性を定めていく本研究の知見は、多職種による連携と協働という今日的な医療活動を可能にしている基盤として症例検討会が果たしている情報共有や教育などの機能を明らかにした。このことは、これまで多職種による協働がある種の理念として言及される傾向にあったのに対し、実際に医療現場で展開されている相互行為に着目し、その特徴を分析的に導出したという点において、実践者や現場にとっても意義のある知見を提出することができたと考える。

(2)　精神医療を対象とする社会学的研究が、精神医療の現状を否定的に捉える傾向を有していたのに対し（河村 2022）、本研究は、研究者の価値判断に先立つ形で、精神医療実践において行われている諸活動を、参与者の志向に即して記述するエスノメソドロジー研究の方法論的態度において記述した。そのことによって、薬物療法が主流とされ、そのような治療的態度に批判が向けられているなかで、医療従事者らの活動における薬物療法は、あくまで数ある治療のひとつであり、患者の成育歴や家庭環境など、多様な情報をもとにして適切と思われる治療方針を立てて行われている精神医療の実際を、可能な限りありのままに記述することに成功した。

(3)　日本における多くの医療社会学研究がインタビューを調査手法として用いてきたのに対し、本研究では、精神医療従事者にとって教育的機能を有し、医局員の治療傾向を把握する場として重要な位置づけにある症例検討会でのフィールドワークを行うことによって、精神医療という実践の多様さを記述することができた。そして、インタビューという活動が常に実践に対して事後的に行われるものであるがゆえに、記述されるのは実践そのものではなく、あくまで「実践についての事後的な語り」であるのに対して、実践そのものに内在する諸特徴を分析的に明らかにしたことにより、日本の医療社会学における方法論的議論に貢献し得る知見を提示することができた。

(4)　主にアメリカやイギリスにおいて行われているインタビューを手法として用いない医療社会学的研究は、医師患者関係に着目し、診察室での相互行為に限定した議論を行ってきた。そのことにより、医師と患者が織りなす実践の細やかさを記述することに成功しているといえるが、

診察室に限らず、後輩医師の指導や他職種との交流など、幅広い場面において展開されている医療従事者の活動を十分に捉えてきたとはいいがたい状況にある。本研究は、実際の医療現場で行われている医療従事者の多様な活動に着目し、それらをエスノメソドロジー研究の方法論的態度において記述したことにより、精神医療従事者の活動の多様さを分析的に導出することができた。このことは、会話分析研究が着目し得る場面が診察室以外にもあることを示したり、エスノメソドロジー研究の有用性を提示したりしているという点において、国際的な研究動向に対しても本研究が一定の貢献をなし得ることを示しているといえる。

(5)　上記のとおり、実践の参与者の志向に即して現象を記述するエスノメソドロジー研究の方法論的態度において調査研究を進めたことにより、精神医療従事者にとっても自らの日々の臨床実践を振り返ったり改善したりする知見を提出できた。そして、得られた知見を、精神科医をはじめとする精神医療従事者らが参加する日本精神神経学会で報告した際に、精神医療従事者から関心を持ってもらい、調査が容易ではない精神医療の現場における更なる調査へとつながった。

＜引用文献＞

① 河村 裕樹、『心の臨床実践』ナカニシヤ出版、2022

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 杉林稔，河村裕樹
２．発表標題 精神科におけるケースカンファレンスの意義と実際についての試論
３．学会等名 第118回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2022年

１．発表者名 河村裕樹，杉林稔
２．発表標題 精神医学的知識や専門性はどのようにして理解可能か
３．学会等名 第118回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2022年

１．発表者名 河村裕樹，杉林稔
２．発表標題 精神科における症例検討会のワークの研究
３．学会等名 第95回日本社会学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 河村裕樹・杉林稔
２．発表標題 精神医療における専門性――症例検討会に着目して
３．学会等名 第94回日本社会学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 杉林稔・河村裕樹
２．発表標題 記述のチュートリアル性――精神科症例検討会におけるワークに着目して
３．学会等名 日本質的心理学会第18回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関